

新土俵を歴史つなぐ力に

高校相撲金沢大会

5月21日に石川県卯辰山相撲場（金沢市）で行われる第107回高校相撲金沢大会は、観客の声出し応援が解禁となり、大会前日の選手交歓会実施を含め、4年ぶりに通常開催されることになった。

大規模改修中の卯辰山相撲場は観客席がベンチ仕様になり、車椅子の専用席も設置される。雨天時はぬかるみやすかった選手控えスペースは透水性の高い舗装となる。金沢大会はそのこけら落としとなり、装いを一新したスタンドで伝統の応援風景が復活するのは大会の再スタートにふさわしい巡り合わせといえる。

1915（大正4）年6月に金

石海浜で第1回大会が開催された金沢大会は、兼六園球場など会場の変遷を経て、61（昭和36）年から完成間もない県卯辰山相撲場に会場を移して幾多の名勝負、ドラマが繰り広げられてきた。

土俵、スタンド一体となった熱気が金沢大会最大の魅力である。新たに整う「卯辰の土俵」を全国

最古の高校スポーツ大会としての歴史をつなぐ力にしていきたい。大相撲は昭和の時代、中卒が大半だったが、平成以降は大卒を含む高校相撲出身が主流をなすようになった。このことは相撲選手の発掘、育成機能の中心を高校が担っていることを示す。

幕内の取組では、出身地とともに出身高校に注目が集まり、先輩、

後輩対決も珍しくなくなったが、高校相撲は厳密にいえば、角界に力士を送り出すためにあるわけではない。他の部活と変わらず、教育活動の一環である。

今年の金沢大会では、選手がアナウンスされてから立ち合いまで30秒以内を目安とする「金沢方式」が導入された。相撲は立ち合いが勝敗を左右する競技だが、仕切りの動作をわざとずらし、相手の集

中力を切らせるような過剰な駆け引きもみられた。「息を合わせる」が立ち合いの基本であり、金沢方式は競技の原点を取り戻すうえで重要な改革といえる。

金沢大会は地域の相撲文化や相撲ファン拡大に貢献してきた「相撲王国」石川のシンボルである。競技人口の減少が進むなか、相撲の魅力を発信する場として地域挙げて盛り上げていきたい。